

# アメリカの子どもの生活



東洋

わたしは一九五六年八月に日本を出て、今年の四月に帰って来ました。四年間は、イリノイのイリノイ大学で、後の一年間は、ニュージャージーのプリンストン大学で学びました。今日は児童学の現状について話すように言われましたが、わたしは専攻は「概念形成、測定」で、児童プロバーの事はあまり勉強して来なかったので、わたしの二人の子どもを育てた経験を通して、アメリカの子どもとの違いについて考えさせられたことを話してみたいと思います。わたしの子どもは、上は男で、わたしが向うへ行ってから一年半後に三才で、家内と一しょにやっ来てまして、満七才で帰って来ました。下は女で、向うで生まれ、満二才で帰って来ました。ふたりつきあわせると大体出生から小学校に入るまでの子どもの生活のイメージになると思うのです。

アメリカは我々の想像よりもはるかに大きく、一ヶ所にとどまっていると、そこだけがみえて他は全くわかりません。東京にいて大阪がわからないのと、ちょっと程度が違ってわからないのです。わたしはイリノイとニュージャージーの二ヶ所しかみていないということを最初にお断りしておきます。都会と田舎と違うということは日本も同じです。イリノイのシャンペーンは人口七〇八万、ニュージャージーのプリンストンは二万五千ぐらいのところですから、ニューヨークやシカゴの子どもの生活はもっと違っていると思います。

そのへんをおふくみただいた上でクロノロジカルに子どもの生活を話したいと思います。

先ず赤ん坊が生まれる前が一さわぎなのです。赤ん坊ができてという診断を受けてから定期的に診察を受けるのはもちろん

ですが、さらに両親教育というわけで病院から呼び出し状が来ます。日本のおかあさん教室のようなものですが、夫婦が一しよに講習会を四回受けなければなりません。わたしたちもこの講習を受けました。

第一回はお産に関する予備知識、妊娠異常の兆候とその処置（日本のようにこまごまと説明しないで、こんな兆候があったら医者へ電話をかけて、医者にまかせよという簡単なもの）。要するに妊娠中の心得を、産科の医者が話してくれます。妊娠中の性生活やお産についての概略の知識もあたえます。

第二回は、新生児期の世話の仕方で栄養士、小児科医、保健婦、さらには乳児用品のセールスマンなどが、ミルクの調合の仕方や栄養について話してくれます。調合したミルクを入れて、器ごと全部蒸す器具があります。乳児食がベースト状になっているのは近頃日本でも多くみかけますが、その内容が千差万別で、例えば、肉だけでもいろいろの肉を食べないと偏食になるなどといって、七面鳥やらこうしの肝やら実にさまざまです。アスバラガスも人参もみなベーストになっています。

第三回は赤ん坊の衣類に関してで「キモナ」を大いに推奨していました。日本の着物のことです。おしめのあて方をお父さんが実習させられます。入浴のさせ方も人形をつかって実習します。

第四回は乳児の病気と健康管理について小児科医の講義です。

妊娠中の診察は大体三週間に一度受けます。健康保険制度はあまり発達していませんが、私共の世話になった病院では妊娠から出産まですべてをこみで三五〇ドルで、それだけ払いますと、途中に何回医者へ行ってもよいのです。

いよいよ出産です。この指導は病院によってまた医師によってさまざまで、無痛分娩が良いと言う人、そうでないと言う人まぢまちです。無痛分娩は、日赤でやっている条件反射式のものではなく、麻酔によるものです。本人の希望と、かかった医者のやり方をつき合わせた方法でお産をします。わたし共のかかった医者は無痛分娩の信者でした。無理に、麻酔をしてよいという印をつかされました。お産にも夫が立ち合わせ、産後も夫のみに面会が許されます。その他の人は全部シャットアウトです。日本では妻の母が来ますが、妻の母でもシャットアウトです。これは産婦の休養にたいへん良いと思います。赤ん坊は別室にねかされます。病院の看護婦さんは親切で感じが良いのです。これはわたしばかりでなく誰もが日本と比較してそう言い、アメリカにいるうちにお産がしたいと言います。待遇が良く、労働時間が短かいせいもあるでしょう。ほとんどがミセスで、未婚の人はほとんどみかけませんでした。それで産婦の気

持が理解できるのかもしれませんが。産婦が休むのにたいへん良い環境だと思いました。

新生児室は母の向かい側のへやで、保母以外は立入禁止です。ガラスばりで、面会時間だけ父がのぞきに來るのです。すると、保母が窓の近くへつれて來て來て、十分間の面会時間の間だけ、保母に「さわりたいでしょう」などと言われながら、のぞいているのです。

入院期間が短かいのには驚きました。産後、翌日には立つて看護婦につられシャワーをあげ、歩くことをすすめられます。二日目に入浴の講習があり、こんどは赤ん坊をつかってみますが、これも、母親を歩かせることが目的です。アメリカ人はタフです。産室に入る順番を待っている間、次の順の人に良く話しかけますが、お産後、産室から車にのせられて出て來た産婦が、はらんばえになって、ほおずえをついているんです。「ハイ、あなたのところは、どっちだった？」などとはなしかけながら通りすぎて行きます。三〜四日目にハイヒールをはいてさっさと帰って行き、翌日はもうおしめなどをほしてあります。人種が違うせい、やり方が違うせいかわかりませんが、早ければ三日〜四日、おそくても五日〜六日に退院して行き、家で子どもの面倒をみます。一週間目には、病院から保険婦が來て、耳の掃除などをしてくれます。乳製品の器具などの消毒

をしているかきかれ、「している」と言うのと、「みせなさい」といって、がっちり点検指導します。ねかせるために、籐であんだバシネット、クリップ（ベビーサークル）を用います。

アメリカは夫婦で出かける社交の機会が多く、小さい頃から子どもを家において出かれます。その時ベビースイッターを頼みます。これは、大学またはハイスクールの男女の学生がアルバイトとしてよくやります。このアルバイトの希望者は、ベビースイッターの心得を読まされます。一時間五〇セント〜七〇セントぐらいもええです。「お前はおしめをかえたことあるか」などときかれ「たぶんできると思う」などといってやる男生徒がいます。

ナーサリー・スクールは千差万別で、託児所的なものから、幼稚園の子備校的なものまであります。施設の資格もさまざまで、普通の民家もあります。最低年令もまちまちです。わたしの子どもは、三才以上幼稚園までの子どもの入る、教育に主力をおいた所へ入れました。うたや簡単な外国語を教えています。園長はスイス人、先生はドイツ人、子どもは日本、イギリス、オーストリア人などと、アメリカ人が半分ぐらいでした。朝九時から昼十二時までで、一回、ジュースやビスケットのおやつが出ました。ナーサリーによっては、食事を出して、夕方までつづける所もあります。「うた」はリズムカルですが、比較

的単純でメロディアスではありません。うたえるといいのですが、例えば、ヤンキーロードとか、オーマクドナルドのように、ことも抒情的ではありません。後で、プリンストンで幼児教育をやっていた人にきくと、日本を讚美して、日本のうたのように抒情的なのがいいといっていました。けれども私には、情緒的でなくあかるくリズムカルなアメリカの童謡は健康でよいと思われました。クリスマスの前にはクリスマスキャロルを教えますが、これはきれいなメロディーです。アメリカ中西部はどうも声の出し方がきたないように思いました。(ギャッキヤット) はなしているときれいなのに。教会の音楽を除いて、一般には音楽は日本の方が、すすんでいるように思えました。

幼稚園は公立学校に附属しています。イリノイでは学校の中にありましたが、費用はPTAもちでした。これは学校のPTA会計の中から出すという意味です。各州で幼稚園や、学校制度が違います。たとえばある州は六・三・三、ある州は六・二・四です。

学校前に幼稚園に入ることは当然になっており、小学校の一年生は、幼稚園を出たこととして始めます。

幼稚園で何をするかと申しますと、主として「リーディングレディネス reading readiness」をつけることだそうです。話をよんでやる、大きな字を教える、読むことに興味をいだけせ

る、読めるようになるという希望をいだけせる、簡単な字をかけるようにすることが目的だそうです。それから、集団生活になれさせることです。

小学校下級では、他の科目を犠牲にしても、国語のよみ方・かき方に力を注いでいます。アメリカには漢字がないので、二年生ぐらいまでによみ方・かき方を教えると、自分のボキャブラリー vocabulary のあるだけ、自分で読むことができるのです。それぞれの興味に応じて、それぞれの分野の本をどんどん読んでいけます。日本だと子ども向きにかかれたものしかよめませんが、アメリカではおとなの本でもわかりさえすれば読めます。漢字にさまたげられることがあります。このように最初に英語を読める力をつけるので、算数などの教育は日本よりもおくれます。

子どもの生活は、学校や幼稚園の他に、コミュニティ community の働きがあります。アメリカは、あちこちに小社会ができて、それが集まって国になったのだという意識が強く、コミュニティーの考え方が、我々の国より強いのです。this town; this city というところと this community というくらいで、自分の住んでいる周囲、住んでいる仲間の意識が強いのです。子どもが悪いことをすると隣りのおばさんがどなりまます。叱ってあぶないことから保護してやるのです。子どもの

教育は、コミュニティー全体の責任という考え方が徹底しています。コミュニティーの中心は教会で、日曜学校はコミュニティーのインテグリティ *integrity* をつけるのに重要な役をしています。大きい子と、小さい子の縦の組織が緊密で、教会を中心にしたコミュニティーの果す役割は、学校の他に重要です。

小学校は日本より小さく、一クラス二五人以下です。わたしのクラスは二八人もいます。これでは教育はできないとこぼしている先生があり、三〇人もたせると、先生がストライキをします。へやの大きさは、日本の五〇人のへやぐらいで、大きな窓、リノリウムの床です。先生は後にデスクをおき、話す時は、前や横で話します。この小さいクラスをさらに小グループにわけるとも多く、とくに作業によってグループをわけています。

ニュージャージーはスクールの制度が発達しています。イリノイでは——学校の予算はそれぞれのコミュニティーで決め、住民に承認を求めますが——大学町で、進んだ教育の理念をもち、小学校からフランス語などを教え、先生も多数で、金のかかる教育をしています。

昔から住んでいる主として農業にたずさわっている人々がそのため、予算をけずるように要求したので、教育委員会はスクールのバスをやめてしまいました。一番迷惑するのは、遠くから

学校にやっているこの百姓たちだったのです。わたしの子どもはちょうどこのバスがなかった時に小学校に入りました。近所の数人が相談して、交替で車で送り迎えしました。これをカー・プールといいます。昼食は持つていってもいいし、一回二五セントでとっても良いのです。

子どものあそびをみますと、男の子はすぐギャングを組織します。一つのギャングは、四〜五人から七〜八人で同年令または一年ぐらい違います。ギャング同志でよくけんかをします。ところがけんかのルールがあって、けとばしたり髪をつかんだり違反です。あるときひとりの母親がギャングをあつめてけんかの練習をさせていました。母親はなかなか権威があつて、ルール違反をすると「やめ」と叫び、ひどくさりお説教してからまた「はじめ」でとっくみあいをはじめます。大学の助教授の奥さんでしたが、日本の中流の奥さんたちがとかく自分の子どもを「いい子」に育てるのに汲々としているのに比べ、そのカラリとした積極性と元気のよさをうらやましく思っています。全体にアメリカの強さやすこやかさは田舎町にあるように思います。大きい子が小さい子をいじめている場面、男の子が女の子をいじめている場面は見たことがありません。けんかをしても女の子が出て来ると、「いけないう」といってにげ出してしまつて、追いかけているのはいつも女の子……という

調子です。

学校は週五日制で、土・日と休みです。日曜は日曜学校へ行くのが普通です。宿題はめったにありません。

夏休みは二ヶ月あります。余裕のある家ではキャンプに送ります。一年生は日中だけの通いキャンプ、二年以上は泊まりがけで、YMCAその他が主催しています。湖のほとりなどで二、三週間を過ごし、目的は団体生活の訓練にあります。各コテージ *cottage* にリーダー(学生)がおり、水泳の先生が数人いて訓練をします。およげるようにしてほしいというのが親の希望の主たるものようです。夏休みも宿題は出ません。この時は先生方の研修の期間なので登校日といったものもありませんでした。

日本でも子どもたちはお正月をたのしみにしますが、アメリカの祝祭日をたどってみましょう。まずイースター、母がいろいろな所へかくした卵を探したり、ウサギの形のマシユマロを食べたりします。七月四日、独立記念日で、どこの町でもパレードをし、フロート *float* (だし) が町中をねり歩きます。夜には町の大グラウンドで、皆がマッチを一斉にすつてもえるまでもっているマッチセセレモニーや、花火大会をします。それから、ハロウィンパーティーがオールセイントの前の日にあります。子どもたちはゆうれいやいろいろの扮装をして、袋をもって、知

っている家も知らない家も “Tricks or treat” (「ちそうをよこせ、さもなぐばいたずらをするぞ!」) といってまわります。一晩に食べきれないほどのお菓子があつまります。それから、クリスマス・パレンタイン(友情の日)などで、パレンタインには、ハート型のカードを、好きな友人同志が送り合います。小学校五年以上は、ダンスパーティーがあります。

以上を要約して、私の接した範囲でのアメリカの子どもの生活には、田舎ぐらしの親しきや野生味と、近代社会の個人主義のルールとが適当にまざっているのをたいへんうらやましく思いました。そしてそれを可能にしているのは、コミュニティすなわち地域小社会に有機的な統合のあることだと思えます。家族の成員の相互の関係がくずれていたりまたは封建的なものに支配されていたりするとその家庭の子どもはふしあわせであります。それと同じように、となり近所の関係をもとにした地域小社会が、よいまとまり、カラリとした雰囲気、そして子どもたちに対する善意と理想をもっていないなら、そこに育つ子ども達はやはり不幸だと思えます。そしてこの点でわが国はアメリカにも、またおそらくはその他の国々にも、まだまだ学ばなければならぬのではないのでしょうか。(日本女子大学)

(5月11日 お茶の水女子大学児童学科 I・C・R・C 会)

おける講演の転記である。)